



元気通信

ブダペスト日本人学校

学校だより

平成28年10月 4日号

【アートフェスティバルを終えて】(アートフェスティバル担当 雨森・甘利)



23日(火)にアートフェスティバルを実施しました。前日まで天気を心配しましたが、当日は秋空の下、全校児童生徒みんなで市民公園へ出かけることができました。小学部1, 2年生は市民公園内、小学部3, 4年生は英雄広場、小学部5, 6年生はヴァイダフニャディ城、中学部はセーチェニ温泉周辺にて活動を行いました。それぞれにブダペストの景観をじっくりと見学し絵を描いたり、作品作りをしたりと集中して作業に取り組むことができました。

文化的・芸術的に価値の高いものを見つめることのできる有意義な時間となりました。

【後期児童生徒会について】(児童生徒会担当 佐藤・甘利)

10月3日(月)に後期児童生徒会役員任命式が行われました。後期は、児童生徒会会長の寺岡愛実さん、副会長の柴田果凜さんの2人を中心にして、児童生徒会がより一層盛り上がっていくことを期待しています。新役員から一言です。

・「小さい学校だからこそできる良さを生かして、みんなで達成感を味わえるよう全員を引っ張っていきます。」

＜児童生徒会会長＞ 寺岡愛実

・「日本人学校での経験は浅いですが、会長のサポートをしつつ、BJSの土台になれるよう頑張ります。」

＜児童生徒会副会長＞ 柴田果凜



＜児童会会長＞ 佐脇彩夏 ＜児童会副会長＞ 児玉真輝

＜生活委員長＞ 生天目洸星 ＜環境福祉委員長＞ 渡邊汐葵

＜図書委員長＞ 宗田徒和

【研究授業③ 中学部2・3年 音楽科】(授業者：坂井 教科領域研究主任：大久保)

中学2、3年の音楽授業では、ハンガリーの作曲家コダーイの管弦楽組曲「ハーリ・ヤーノシュ」の中の「間奏曲」を鑑賞する活動を行いました。現地教材開発として、曲の背景を知って名曲を味わおうという題材の中に、ハンガリー情緒溢れるこの曲を設定しました。

コダーイは、ハンガリー民謡をハンガリー音楽の原点と考え、その収集や研究を行い、自己の作品にそれらを投影させています。民謡に由来を持つヴェルブンコシュや民族楽器ツィムバロムの起用、管楽器による大草原の農家の様子を表現しているこの曲から、ハンガリーの魅力を感じてほしいと考えました。

研究授業では、曲を何度も聴き、曲の中のどのような音楽的要素や特徴からハンガリーを感じられるのかということのマッピングする活動をし、その内容を参考にして意見文を書きました。それをグループで発表し合い、他者の意見の中に共感や違いを発見することを通して、音楽観が広がったようです。

生徒たちは、ハンガリーに関する教材を使ったこの学び合いスタイルを通して、鑑賞活動に意欲的に取り組んでいました。一方で、ハンガリー情緒を感じる手掛かりとなる情報を的確に提示することの難しさを感じました。今後も、ブダペスト日本人学校でこそ取り組める音楽活動を研究し、現地での様々な生活体験や学習活動の積み重ねが、子ども達の現地理解へとつながっていくよう努めたいと思っています。(坂井)

今回の実践では、コダーイというハンガリーを代表する作曲家が作った曲を使って、鑑賞の学習に取り組みました。「ハンガリーらしさ」をとらえるために、曲を聴くだけではなく、コダーイに関する資料やオーケストラの映像資料など複数の資料を活用することで子どもたちがハンガリー音楽に触れることができたように感じています。また、自分の思考の整理をし、意見文を書くためにマッピングという手法を用いたことも効果的でした。

一方で、子どもたちとハンガリー音楽の結びつきが弱く、「事前の知識をもたずに曲を聴く」という課題のつかませ方が適切ではなかったのではないかと、また、子どもたちに情報を与える時間が多くかかりすぎることによって本時の課題解決に至らなかったのではないかとという問題点が挙げられました。事後研究会の議論の中では、子どもたちと現地教材を近づけるための手立てとして、「身近な音楽に触れさせる」などの案が出てきました。

次回の研究授業は10月に小学部3・4年で実施されます。子どもと現地教材を結びつける手立てを意識しながら日々の授業づくりを進めていきます。